

古河電工産業電線

販売前年並み1万9300トン

本年度 見込み 汎用減も機能線堅調

建設用電線×カーの古河電工産業電線(本社・東京都荒川区、松本康一郎社長)は2019年度の売り上げが銅量ベースで前年並みの1万9300トンとなる見通しだ。可とう性架橋ポリエチレン絶縁電線(LMFC)などの機能線が堅調に推移し、汎用電線の減少分をカバーした。販売価格の指標となる銅価の値下がりがあったものの、売上高は前年並みで推移。収益面では、生産体制の効率化などが寄与し、増益を確保する見通しだ。

生産体制効率化で増益

内訳として、上期(1-9月期)の実績は9800トン、下期(10-3月期)は9500トンを見込む。主に盤内配線に使われるLMFCなどの機能線が好調に推移。12月末で閉鎖した北陸工場(石川県羽生)生産量も増加した。収益面では、18年度比で増益を確保する見通しだ。当初見通しに

ついても上振れするとしている。LMFCの製造コストの削減に加え、セパレーターを省略し、口剥き作業の効率を上げたケーブルが好調で利益改善につながった。

一方で、20年度の見通しについては、売上げ銅量ベースで今年度と同程度の1万9000トンを見込む。収益などの特長がある。

面では営業利益を19年度見通し比で倍増させる。北陸工場の閉鎖に伴い、CV(架橋ポリエチレン絶縁ヒルシ)エチレン絶縁ヒルシ

1スケープルの生産拠点を平塚工場と栃木工場(栃木県栗原郡)に集約した。平塚工場(神奈川県平塚市)で導体の伸線工程とめっき加工の工程に投資を行い、LMFC用導体の内製化し、収益力強化を進めていく方針だ。

「らくらくアルミケーブル」 20年度売上高3倍超

古河電工産業電線は20年度、高機能型低圧アルミ導体CVケーブル「らくらくアルミケーブル」の売り上げ規模を19年度比で3倍以上に拡大させる方針だ。この製品は導体にアルミを、絶縁被覆に架橋ポリエチレンを採用したものの、従来のCVケーブルに比べ、質量が同サイズで約半分、曲げやすさが約3倍などの特長がある。

4月・同社の平塚工場(神奈川県平塚市)に

アルミCVケーブルの施工が体験できるトレーニングセンターを設け、ビジュアルを進めていく方針だ。